ブータンに魅せられて

今枝由郎著　岩波新書　740円

08-6-1Y

評・樋野 信治（本社論説副委員長）

97%が「幸せ」な小国

書評する前に、世界地図をつらつら眺めた。チベットとインドに挟まれ、ヒマラヤ山脈の南側にへばりつくのがブータンだ。面積は日本の九州程度。人口60万人の小国である。

（本書より）

本著はブータンに対するオマージュといえるが、著者自身の動きもなかなか読ませる。大学でチベット仏教を学んでフランスに留学。1975年に訪仏したブータン宗教界の一行と知り合い、当時、鎖国状態だったブータン訪問を思い立った。翌年、ニューデリーのブータン公館を訪ねてビザ発行を請求したが、3か月間待ってもかなわなかった。同じようなことを5年も繰り返し、本格的に入国できたのが81年だったというから、相当な粘り腰の持ち主だ。

入国後、ひょんなことから国立図書館の顧問に就任し、図書館の新築やシステムの整備などを手がけ、10年間も長居した。なにやら現代の浦島太郎を思わせる。その体験と直近の動きを交えて本著を書き上げた。

ブータンは一言でいうなら、極端な近代化を避けながら伝統文化を守り、自然との共生を図る環境志向の国だ。それは、前国王が語った「GNH」という造語に象徴される。GNP（国民総生産）ならぬ国民総幸福＝グロス・ナショナル・ハピネス。目指すべきは経済成長ではなく、国民の幸せだという意味である。

ブータンは道路や飛行場といったインフラ整備より、森林や農地の保全を優先している。最大の産業は水力発電だ。大規模ダムは造らず、急斜面を流れ落ちるヒマラヤの雪解け水などをうまく使って発電する。その電力をインドに輸出し経済を支える。ナイルの賜物（たまもの）がエジプトなら、ブータンはヒマラヤの賜物である。

観光公害を防ぐため、登山も禁止する。国民は仏教に帰依し、伝統的な民族衣装を身にまとって暮らす。この結果、国民の97%が幸せだと答えた（2005年の調査）という。まさに、世界に幸せのあり方を問いかける国なのだ。

◇いまえだ・よしろう＝1947年愛知県生まれ。仏国立科学研究センター研究ディレクター・東洋仏教史。